



令和3年6月24日
台船に引き揚げられた機体（左翼）を
調査する遺骨収集の調査団

【第17回】

喜志鹿崎沖で発見された 旧日本軍機「九七式艦上攻撃機」

遺骨確認・機体特定には至らず
6月15日から始まった調査は、現場海域の悪天候により難航。遺骨確認のための機体引き揚げは、作業開始9日目となる23日からの2日間でようやく実施されました。

令和3年6月、喜志鹿崎沖に沈む旧日本軍機が引き揚げられました。今回の調査は、市内ダイビングショップ代表の林哲郎氏が、機体の存在を知る地元漁師らの話を元に、独自に調査を始めたことがきっかけとなり、国（厚生労働省）が主導する「戦没者遺骨収集調査」へと発展したものです。



▲ふるいを使った遺骨収集調査

全長：10.3 m
全幅：15.5 m
全高：3.7 m
自重：2,200 kg
最大速度：377.8 km/h

九七式には3つの型が存在し、「二型」の表記確認から中島製三号機と判明している。（8月号市長独言No.52に写真掲載）

重なる資料となる。九七式には3つの型が存在し、「二型」の表記確認から中島製三号機と判明している。（8月号市長独言No.52に写真掲載）

九七式艦上攻撃機（九七艦攻）
昭和12年に日本海軍に採用された航空母艦搭載用の3人乗り攻撃機では、昭和16年12月8日の真珠湾攻撃で主力を担った。
太平洋戦争の末期には旧式化し、昭和20年4月から始まった沖縄航空作戦では、串良航空基地（鹿屋市）から出撃した「特攻機」にも一部使用されている。
これまで、アメリカとイギリスの博物館で機体の一部が、日本では宇佐市平和資料館でプロペラ部分が確認されている程度で、現存資料は少ない。今回の調査機体は、大変貴重な資料となる。



（写真提供：宇佐市教育委員会）



ゆかりの地 宇佐市へ

大分県北部に位置する宇佐市は、1市2町が合併し、平成17年に発足した人口約5万4千人のまち。

戦時中の昭和14年、艦上攻撃機搭乗員などの訓練を行う『宇佐海軍航空隊』が開隊し、現在も滑走路跡や爆弾痕、空襲から軍用機を守る掩体壕（えんたいこう）などの戦争遺構が数多く残る。

今回引き揚げられた機体は、10ショットラック2台に積まれ、7月29日に西之表市を離れ、翌日に宇佐市に到着。到着後、是永修治市長ら関係者約20人が参列し、献花式が行われた。宇佐市では、3年ほどプールで塩抜きした後、平和資料館に展示する予定である。



▲背もたれ部分が折れ曲がった座席（前席の操縦席）
なお、中席の偵察席、後席の機関銃席は確認できなかった



▲コックピット周辺から見つかった鉛筆（約7cm）は、人の気配を感じさせる数少ない資料である

76年以上経った機体は劣化が進み、潮流の激しい現場から引き揚げられた時点で、左右の主翼と尾翼の3つに分断されましたが、想像以上の大きさで、一定の形を保っていました。しかし、プロペラやエンジン部分は発見当初から無く、上下ひっくり返った機体のコックピット部分も大半が失われた状態でした。

市は、国の委託を受けた日本戦没者遺骨収集推進協会に協力し、機体周辺の砂から遺骨や遺留品を探す作業に加わりました。4日間続けた作業で遺骨は確認されませんでした。鉛筆やペンチのような工具が発見されました。

国は、27日に「遺骨確認なし」という調査結果を八坂市長に伝え、調査の全行程を終えました。

戦争を伝える資料として

その後、市では国の承諾を得て、7月11日に市民体育館駐車場で一般公開を実施。五百人を超える方の来場がありました。最終的に、機体は大分県宇佐市が購入することになりましたが、市では海底の様子を細かく記録保存しており、画像の3D化（フォトグラメトリ）などで活用を図る計画です。まずは、12月に鉄砲館企画展「九七艦攻展」を開催します。ぜひ、ご来館ください。

（文責：文化財係長 鯉島 亨）



2,000枚以上の写真を使い3D化することで、動画のように上下左右あらゆる角度から立体的に見ることができる。

種子島北端の喜志鹿崎沖から引き揚げられた九七式艦上攻撃機の機体が7月、一般公開されました。尾翼に「一二型」「號」の文字があり中島飛行機製造とわかりましたが、機体番号などは見つからず、搭乗員の特定はできていません。一方、鉛筆や工具のほか尾翼部分が見つかり、今後の詳細調査に期待がかかります。

喜志鹿崎には日本軍の砲台跡が今も残り、昭和20年3月以降の米軍機による空襲や、日本軍特攻機の不時着などの話が数多く語り継がれています。

地元漁師の証言を基にダイバー林哲郎さんらが海底の搜索を始め、平成27（2015）年秋、砂に埋もれた機体を見つけます。市も協力して平成30年から潜水調査をし、特攻機乗員の遺骨が残る可能性から厚生労働省が加わりました。別の証言により馬毛島での遺骨収集事業も実施され、中世の人骨が埋葬された馬毛島葉山王籠遺跡の発見につながっています。

そして、新型コロナウイルス感染症などの影響で2年間保留された調査がこの6月、2週間にわたって実施されたのです。現場は湖の流れが急で日本戦没者遺骨収集推進協会（会長・尾辻秀久参院議員）と厚労省の調査団の作業が難航する中、地元の藤田建設興業の起重機船による慎重な引き揚げに成功しました。

沖繩への途中、種子島に不時着した特攻機九七艦攻の例はほかにもありますが、現存する機体としては国内唯一だそうです。ひしゃげたパイロットの座席、革ベルト付きのペダル、操縦桿、浮き袋に人間の気配が残り、なぜ、どうやってこんな形で遺されているのか、説明が待たれます。

機体は、海軍航空隊のあった大分県宇佐市に移される予定です。本市も調査時の映像を基に、3D（3次元）のフォトグラメトリによる展示などの利用を検討しています。



水平尾翼に残る「一二型」「號」の文字